

みなさんこんにちは。今ご紹介いただいた辻井でございます。

他の先生から庭園についても造詣が深いなんていわれると、当人がびっくりします。

まあ言ってみれば植物園に長くいましたので止むを得ずというか、庭園のことについて少し勉強しなければならなかったということと、それから私は今もご紹介いただいたように湿原をずっとテーマにしてきたんですけども、もともとは応用植物学教室という（今はもう教室の名前はすっかり名前が変わりましたけれども）ところにいまして、あるときは森林の調査もやりましたし、あるときには牧野、草原の調査も手伝うということもあったわけです。様々なところで様々な言わば景観を見てきたということを含めて、庭園や公園に関心は少くとも持ったと申し上げたほうがいいのではないかと思います。さて、今日与えられたテーマというのは、これも一つの流行かもしれませんが「自然再生の新たな展望」ということです。自然再生というのはお手元のレジュメにも書きましたけれども、今年の一月にいわゆる自然再生推進法という法律ができて、これもかなり関心が高く持たれている分野だということになります。それで先ほど申しましたように、私の専攻分野は湿原だったので、その関連で今、例えば釧路だとかサロベツだとか、あるいはこの近くで言いますとこれは必ずしも全てが湿原ではありませんけれども、美々川、ご存知の千歳から苫小牧に流れている川ですけれども、これが自然再生に関する一つのテーマエリアになっています。そういったことに関わりを持ってお手伝いをしているわけです。

そこで、この自然再生とは何かということになりますけれども、これは例えば北海道でもいわゆる歴史の古い檜山とか、あるいは渡島ですとかなり長い古い時代から人の手が加わっている自然がほとんど大部分です。ことに沿岸では、いわゆる自然植生を見るということは極めて少なくなっていると思います。で、そういうところを見て行きますと、例えば沿岸でしたら当然のことながらそれこそ沿岸漁業が盛んだった時代から木材を燃料として使うということもあって、つい先立ても江差のほうを少し回ってきたんですけども、極めて自然植生に乏しいという景観が延々と続きます。こういったところはもちろん浜風の問題もありますから、なかなか回復が難しいところではありますけれども、少し手助けをすればかなり回復のスピードを上げることができるんじゃないだろうかというところがいくつもあるわけです。ご存知の方も多いと思いますけれども、たと

えば渡島砂坂に有名な防風林があります。ここは名前が砂坂というくらいですから、砂が動いて内作物が極めて作るのが難しいところだった。そこをかなり手間をかけて、北海道でも有名な防風林が成立しているところなんです。そこなどを見ますと、人間が少し手を加えるとそういったところでもかなりいい自然の回復が見込める、あるいはスピードを上げるということができないんじゃないだろうかという思いをするわけです。私は今申しましたように自然の全てを作り上げるというのは不可能としても、自然の回復力に我々が少し手を加える、あるいは誘導するというような言葉を使ってもいいのかもしれませんが、そういうことをすると有効なのではないかと考えるものです。それをここでは、自然再生という広い概念に含めてお話をしようと思います。

ここで今日のテーマの一つとしては「海外の事例から」というサブタイトルが付けてあります。これもまた後で申し上げようと思いますが、確かに海外の事例というのは中々参考にすべきでして、おもしろい事例がたくさんあります。しかしそれはあくまでそれぞれの国や地方でのことです。これから例に挙げようとするのはオランダとイタリアのことですけれども、それはオランダの自然であり、あるいは一方はイタリアの自然であるということになりますし、オランダの自然はオランダ人にとっての懐かしい風景かも知れませんが、我々にとってはエグゾチックではあっても、我々の自然ではありません。同じようなことはイタリアの自然についても言えることになりまして、今からお目にかかる事例もオランダのやっている工法あるいは考えている考え方というのとイタリアでやっている方法とイタリアで考えていることというのは明らかに違います。これは全ての面で言えるはずなので、つまりオーストラリアはオーストラリア流のオーストラリアの自然の再生を考えているし、アメリカはアメリカで全く違う、それぞれに個性的な自然再生を試みているという風に考えるべきではないでしょうか。そうなりますと、ここから先がむしる結論に近くなりますけれども、日本は日本の、あるいは北海道は北海道の、あるいは北海道でも例えば釧路とサロベツと全く同じパターンで考えなくてもいい訳ですし、先ほど例に挙げましたような、美々川は美々川でターゲットはまた別にと取るということを考えもいはずだということになると思います。

こういう風に先に結論を言っておきますと、あとは時間のある限りやっつけていけばいいわけで、大変気楽になるとい

うわけでありませぬ。そこでお話する内容というのをレジュメをなぞっても仕方ありませんから、まず最初にオランダのケースをご覧いただくかと思ひます。これは今年3月に見てきた場所ですが、マース川という川、これはラインの支流ですけれど、オランダの中を流れている川としては最大の一つだという話ですけれど、南から北西にかけて流れて、いわゆるオランダの大きな干拓地の脇を北海に出るという大きな川です。大変面白いことに、ここでのプランニングというのは、このレジュメに簡単に書いてありますように、コンペ方式を取っているんですね。この川をマース川の自然再生を行うのについて、どのような形でターゲットをどこに置いて、どういう方式でやるのがいいのかというのをコンペで計画を出させた、誰でもよかったそうです。つまり大学などの研究機関の提案でも構わないし、いわゆるコンサルタント会社でもいいし、もちろん、個人でもいいし、言うところのNPOそれも自然保護だけでなく、建設関連のNPOでも構わないということで、コンペをやった。一千万くらいの賞金だったそうですけれども、それで出させて、その中で一番いいと考えられたものを採用した。それによって河川局が工事をやったという話を聞きました。そのコンペでいわば優勝したのが、これは研究者も含まれたコンサルタント会社だったんですけれども、面白いことにその工事は、今申しましたように河川局が担当するわけですけれども、そこに今のグループですね、それを全部取り込んだ形で工事をやったという話です。そこで、今お目にかけているのがその河川で黄色く塗ってある部分がマース川の流域ということになります。次お願いします。そこで考え方としては基本的な考え方としては、ここでは川が(断面の)真ん中を流れていまして、堤防が比較的近いところに付けてあって、これよくある日本でもよくあるパターンです。そうすると何しろ河口に近い下流域ですから、洪水が起きると上に点線に書いてあるように、広い範囲が洪水のエリアになってしまうという。それを従来の堤防の位置よりもうんと広い幅で大きな堤防にして、よくこれはルームという言葉が使われているようですけれども、広い中で川を早く言うところの中で蛇行しようがまっすぐ流れようが構わないというふうな形をとるとというのが一つの方法として考えられたというわけですね。資料をお願いします。これがその以前の川の流れと堤防です。川が流れていまして堤防がここに作られている。でも恐らく元は大きな蛇行を繰り返していたものを、また広い河川敷の中に取り込んだわけですね。

次お願いします。川の領分をもっと広げるといふわけですね。元の堤防位置はここですけれども、これ必ずしも全部取ってしまうということではなくて、こっちへ持ってきて、この中でこれは非常に水の多いシーズンの写真ですけれど

も、広がっても構わないという風に、ここなんかはまさにその水没している部分に見えてますけれども、こういう風な形をとるといふことを始めたというわけですね。

次お願いします。これは現在の形になるまでのやり方というわけですね。従来あった堤防を取ってしまう。これは分流の川が流れている。これも取ってしまうと、外側に堤防を築いて、ここまでのオーバーフローはカバーできるようにして、この中を川が蛇行したり、あるいは古川が残ったりするようにしようというわけですね。

次お願いします。これが今、申し上げたマース川です。既に完成した部分がこの部分になります。本当の河口域に近い部分となります。

次お願いします。これは、元の堤防はこの位置にあったわけですが、ここの位置に堤防を引いて、この中は例えばおそらくこれは昔の古川だと思いますけれども、幾筋もありますけれども、こういったものを全部活かして使うという形をとろうというわけですね。

次お願いします。これが今までの農地に使っていた部分、こういうのをよく北海道でも見られますけれども、この部分はもともとは沼だったわけですね。それを恐らく水を抜いて、農地にした、という部分ですが、水を抜いても水位は高いもんですから、生産性はあまりよくなかった。そういうところを丹念に調べ上げて、次の写真ですが、これですね。これに戻す。という形をとっている。ですからまあ元々と言いましょ、おそらくそれまで一所懸命になってですね、こういった水域をできるだけ水を抜いて農地にしたというの、一生懸命やったに違いないわけですね。で、それを何となく感覚的には元の木阿弥、この辺りをどのようにして農家を納得させるかというの、恐らくは非常に難しい問題だったろうと思ひますけれども、現代ではここを元の水面に戻すということをやっているわけですね。

また後でご覧に入れるイタリアのケースもそうですが、イタリアもオランダもいわゆるEUに含まれています。そこでEUの農業政策と強い関連があるわけですね、こういう自然再生というのは、と言ひますのは、今この例にご覧に入れたような部分をなぜそういう、一見無駄なことをするのか、農家をどうやって納得させたんだらうかということをお申し上げしましたが、例えばスペインとかイタリアのごく一部、例えばシチリア島などを除きますと、ほとんどが生産過剰になっているという背景があります。で、生産過剰が農産物の単価が下がっている。そうするとダンピングをしても売れなくなっているし、それからEU圏内では、つまり高くてもいいものを買うといひますが、そもそもヨーロッパの野菜の生産や野菜の価格というものは日本に比べるとはるかに安いわけですけれども、その安い中でも安ければ安いほうを買うという形よりも、様々な形で

様々な意味で良質のものを多少高くても 日本よりも安いわけですけれども、多少高くても良質のものを買うという方向になっているわけです。食の安全性を買うと言ってもいい。そうすると生産過剰が起きると、全体の価格ももっと下がって、つまりそれまで多少高くてもといったものが、必ずしも高くないという相対的な形になっていくわけですね。それが現在のヨーロッパにおける自然再生の動きと大きく関わりを持つということになります。オランダでも全く同じことが起きているわけですし、ご覧のようなせっかくの農地を一生懸命、長年かかってきてせっかく作った農地をなぜ元の水域に戻してしまうかということは、ちょっと私たちが見た範囲ではそういった疑問にすぐぶつかるということになります。今申し上げたようなEUの農業政策、あるいはEU圏内の全体の農業問題ということと深く関わりを持っているということになるわけです。もう一つは、今のは農産物の価格の問題あるいは生産調整の問題ですけれども、日本とほとんど同じことになりすけれども、農家戸数が減ってきているということもあります。それから戸数だけでなく、農家人口、農業人口が減っているということもあります。つまりある段階までは農地を増やす方がいいという、あるいは広い農地で生産性を高めるということにだけ方向が向いていたものが、現在では大きくすると逆にもうしまうと効率は良くなりますが、単価は下がってしまう。これは必ずしもいわゆる農産物だけでなく、ミルクなどの酪農製品についてもいえることでして、それも今申し上げたような自然再生の推進ということに関わりを持つ、相対的な問題であるという風に考えたほうがいいと思います。それが日本にどうなるんだろうということになると、ちょっと私は今の段階では軽々しく申しませんけれども、特にEU圏内で自然再生事業というのは非常に大きく取り上げられ進められているという背景にはそういう問題があるということをお願いしたいと思います。

では、次を見ていこうと思いますが、そういうような背景で様々な自然再生が行われ、先ほどご覧入れたのはかなり大きなスケールのもんですが、もう一つは、農地を単純に元の湿原とか沼に戻すというだけでなく、景観的な一つの資源として使おうという例もあります。例えばこれなどはその一つだと思いますが、おそらくここに見えているものは植林だと思います。そこにここというのは、もともとはここは全部水域だったに違いない。ここに堤防がありますから、ここまではオーバーフローする部分で、現にここでも牧草を作っている部分もあります。ですからここも含めてですね、川が蛇行する部分、あるいはオーバーフローして、あるときには季節的に水が溜まる部分だったと思いますが、その一部をむしろ掘り下げて、そこに水が常時

溜まるような形をとるといって形をとっています。これは恐らく公園とかいう形で使おうとしているのではなくて、むしろ単純に景観的なものでちょっと変化をつけたということではないだろうかと思いますが、こういったものも今の自然再生、マース川流域の自然再生に含まれているということになります。

次お願いします。これが今の最終的な計画だというのですが、今お目につけたのがたぶんこの辺の部分だと思います。最終的には今の堤防に沿って、おそらく昔の流路ですね、これを復活させて、もっと複雑な水域と、それから河畔林とそれから飛び地になっていますけど、沼が何ヶ所もあります。こういった複雑な流域地形を作り上げて、さて後何に使うのかということまでは知りませんが、変化のある景観を作り上げるという、ここまで来ますと、たぶん魚釣りだとか、あるいはカヌーイングだとかいうようなことが色々な形で行われるということになると思いますし、言うところのバードウォッチングなどもこういったところでは十分に行われるということになるんじゃないかと思っています。その第一歩とでも言いますが、それが先ほど出た図で、この部分をそうしようとする第一歩がこれだったというわけです。これも今申しましたように、いわゆる拡大の一途で進んできた農業あるいは農家経営というものはいわば多目的化する、あるいは多面化するといったほうがいいかもしれません。必ずしも単一の作物あるいは農産物だけではなくて、様々な芸能の中に様々な例えば観光農業というようなことも含めて、そういうことを含めての計画だということになるだろうと思います。同じようなことは、今日は写真は持ってきていませんけども、ドイツのエルベ川の流域でも見たことがあります。それは川というより農業用貯水池でしたけれども、水が不足している、あるときには水を必要とする農業、農地にですね、足りない水を供給するために、貯水池を農業用貯水池を作るけれども、それに伴って減少する農地の部分の収入を確保するためにいわゆる農家民宿をその農地が減らされる部分の農家にやらせるというやり方を撮っていました。そのために大変面白かったのは、農業用貯水池の中に、「鳥の島」という名前の極めて複雑なさんご礁のように入り組んだ地形をわざわざ作って、そこに鳥が来るようにして、先ほど申しましたように、バードウォッチングだとか、カヌーだとか周辺には乗馬道を作るというようなことをやって、農家民宿による収入で農家の農地の減少分をカバーするという方式を執るということをやっていました。これはEU以前の問題だったわけですが、おそらく全体の農業を維持させるために良質のものを少量でもいいから作って高く売るといふような方向に転換するということですが、例えば、町へ持って行って売るといってただでなく、「そ

ここにお客に来てもらって売るといった形を含めての戦略であったということを知ることがあります。ですから、繰り返すことになりますけれども、例えばオランダとか今、例に挙げましたドイツなどでもそうですけど、これからお話をするイタリアもそうですけれども、どうやら自然再生というのは単純な自然を復元しようと、あるいは自然保護のためにするというだけでなく、殊に平地の自然再生というのは強く農業政策と結びついているという風に見えるべきではないだろうかと思えます。

では、次お願いします。そこでこれはもってきたフィルムですけど、それを今申し上げたような自然再生を農家の人たちにどう納得させるかというのがやはりオランダでも非常に重要な問題になるということになります。そこで、様々な会合が開かれて、どういう形でやるか、あるいはどういうメリットがあるのか、逆にどういうデメリットが考えられるのかという風なことを討議するということが繰り返して行われてきた。それから計画図面もいきなりではなくて、様々な意見を入れて、何回も書き直しを行って、計画を進めるということまで持ち込んだという話です。

次お願いします。で、これは今申し上げたような、いわゆる組織をどう作るかということについて議論したという、その経過が述べられているわけです。そしていよいよその仕事にかかるということになりますが、これはマース川についてはもう一つ、大変面白いケースがあります。先ほど、川の堤防を後に引いて、いわゆるルームという広い自由な空間をつくらうという例を申し上げたわけですけども、そこでの実験例では長年の洪水の繰り返しによって非常に厚い粘土層がいわゆるその川の高水敷にできあがってしまったことです。この粘土は砂利の目をつぶしてしまいましたから、そこではきわめて植生の回復、発達が悪い。ことに木本類の再生というのは極めて困難であった。そこでまず表面の粘土を取ってしまうという作業が必要だったわけです。それとって、どうするのかというと、取りますと、元々そこに溜まっていた玉石みたいなものですけども、砂利層が出てきます。で、砂利層が出てきた所で放っておくと、ほとんど日本と同じですけど、柳とかハンノキとかが出てきて、3年から5年でもって結構なブッシュができるというデータがあったそうです。面白いのは剥がす作業をこれは、いわば砂利業者ですね、砂利業者にやらせるという計画を立てた。砂利業者にやらせるとはどういう意味かと申しますと、この粘土層を剥がしますと、下から大量の砂利が出てくるわけです。その粘土をどこにやるかという問題があったわけです。粘土をどこにやるのかというと、つまり砂利を採取して、そこにできた穴に粘土を埋めてしまう。つまり天地逆にするわけですね。砂利の上に乗った粘土を取って、砂利を採取して、その下に粘土を粘土を天地する

ということをやります。露出させた砂利の所には、今申し上げたようなハンノキとか、あるいは柳とか極めてよく生えてくるという状態を作ろうというわけです。で、掘った砂利は砂利業者が売って構わないということで、この工事をやった、ということです。説明としては、そういう形で砂利を業者は砂利を売って構わない、で儲けるわけですけども、転置して粘土を処理するというのをやらせるという方式であると。これは恐らくまた放っておけば砂利や粘土が供給されることになると思えますから、いつかの段階でまた同じようなことをやらなければならないということになるかもしれませんけれども、砂利の供給源としても使う。砂利を表面に出して、河畔林の再生に役立てるという方式をとるということです。

次お願いします。様々なことが先ほど申しましたコンペによる計画でもって進められて、どうやら今までのところはおまわり進んでいるという説明でした。

先ほど申しましたコンペで優勝したのはコウノトリ計画という名前なんだそうです。コウノトリというのはこの辺にたくさん巣を作って昔、たくさん巣を作っていたわけですから、その再現も含めてコウノトリ計画、優勝した計画のテーマがコウノトリ計画というものだったんで、最終的にはコウノトリを呼び戻すということも含めてのことであったという話です。

次に、イタリアのケースです。イタリアというのは実は、私がいいたい先ほど最初に申し上げたように、湿原をやっていたんですけど、もっぱら本当にごく最近まではもっぱら寒いとこばかりを扱ってきました。北海道に長くいますと、暑いのが苦手な東京なんかも、つい昨日行ってたんですけど、もうたちまち逃げ帰ってきたわけです。というわけで、北海道はもちろんですが、例えばカナダだとかあるいはシベリアだとか、なるべく涼しいところを狙って仕事をしてきたわけです。ところが最近になって逆に例えばインドだとか、カンボジアだとかそっちのほうの湿地を見るチャンスが少し多くなってきて、こと志と違っているわけですけど、もともとはそういう寒い、寒冷な地方を狙っていたわけです。

実は今日、今これからお目にかかるこのイタリアもご存知の通りどっちかっていうと暖かい地方だと、地中海沿岸ですから少なくとも北海道より暖かい地方だということになります。余り関心を持たなかったんですけど、たまたま同じような仕事をしている仲間が、面白い所があるから見に行こうということもあって、ここ数年来、何度かイタリアを見に行くチャンスがありました。食わず嫌いということもありますが、全く嫌だという意味ではもちろんなかったわけです。少し勉強してみますと、イタリアというのは湿地だらけなんですね、もともとは、それこそローマ時代

から干拓をやってきた歴史を持っているということを初めて分かりました。ローマ時代と言うとよく水道橋の立派なのが出てきたりして、何か水の供給の面では非常に優れていたところという頭があったんですけど、いやいやその供給だけでなく、どっちかっていうと干拓の歴史のほうが古い。それは当然かもしれません。というのは住む所というのは、だいたい平坦地が楽なわけですから、そういうところに住もうとするわけです。ところが、地中海地方ですから昔はよくマラリアが発生したんだそうですね。それで平地は畑として農地として使うんだけど、住むところは近くの高い丘の上に住んでいるというケースが圧倒的に多かったそうです。そういわれてみると、いわゆる、それは安全性ももちろんあったのかもしれませんが、敵に襲われるという点では、やっぱり山の上に住んでいたほうが安全なわけですから、そういう面もあったのかもしれませんが、一番大きいのはやはりマラリアの問題であった。ローマ時代のイタリアというのは、いかにしてその土地を干しあげるかというのが非常に重要な問題であった。付け焼刃で勉強したら、そういうことが良く出てくるということが分かったわけです。そこで今申しましたように、水道で水を供給するというはその次の段階なので、どっちかという水がだぶつくことがあるところのほうが多くて、それをどう干拓して土地を作るかということの方が最初だったというわけです。

これはベネチアから南に約150キロくらいのところです。コマッキオという小さな街があります。コマッキオなんて言っても、恐らくご存知の方はほとんどおられないと思います。ポローニャと言うと、「あ、どっかで聞いたことある」ということになるんじゃないですか。ポローニャという名前になると、あるいは聞いたことがあるとおっしゃるかもしれません。ポローニャというのは非常に古い街ですが人口40万くらいです。そこから海岸の方に出てきたところにポローニャも川がありまして、そんなに遠くではないわけですけど、ところにそのコマッキオ町があります。この町にコマッキオ潟というラグーン（汽水湖）があるのですが、ちょうど浜名湖のようにウナギなどが獲れます。このあたりは昔はもっとたくさんのラグーンがあったそうですが、それこそ干拓されて少なくなったのです。

長い間にだんだんと干しあげて行って、村ができ、町ができて、現在はここだけ水面が残ったことになります。さっき申しましたように、これはイタリアのかなり北の方の例ですけども、イタリアの沿岸地方というのは実にあちこち、こういうところがあるようです。これも去年の11月にラムサール会議というのがスペインのバレンシアでありまして、帰りにちょっとイタリア寄ったんですけど、そのときにガイドブックを見ましたらば、ローマのすぐ南の

所に同じようないわゆる干拓の古い歴史を持っているところがあって、非常にうまくいっているケースだということのをちらっと読んだものですから、ローマから一日そこに行ってみました。そこはローマ時代からやっているんですが、実際に干拓を成功させてうまい形になったというのはムッソリーニの時代だった。つまり1930年代なんです。まずそこへ行ったときの話をしますと、その小さな干拓地へは駅前タクシーを拾って行ったんですけども、そうしましたら、タクシーの運転手というのが面白い男で、連れて行くところをですね、大いに褒めるわけですね。で、当人はといたら、その出身じゃなくてずっと北の方、それこそポローニャの近辺だったらいいんですが、ここが気に入って住んでいるんだという男でして、その運転手の話によりまして、馬鹿に色々よく知ってまして、ムッソリーニの時代に造って非常に成功して、これはそのムッソリーニの一つの功績だと思うという風なことを言う。ムッソリーニ自身はトータルで言うとあまり評価は高くないんですけど、その都市ですね。干拓地の都市、今で言うところのニュータウンを作ったという点では非常にいいものを作ったというような話をしてました。

さて、そこでも全く同じなんですけれども、このコマッキオも実は同じパターンです。といいますのは、それこそ八郎潟干拓を連想させるような大きな干拓地を作ったわけですけども、いわゆるこの一部は残しておいたんです。なぜ残しておいたのかといいますと、ここは先ほど触れましたがウナギの有名な産地で、結構ウナギが今高く売れるようになってる。で、ウナギというのは日本人だけでなくイタリア人は結構、もちろん蒲焼は作りませんが、結構食べるわけです。そこで、ここでも先ほど申しましたような、EUの農業政策が顔を出すわけです。一つには農産物の価格が下がってくる。あるいは土地をどんどん作ったわけですから、農地が拡大されて農産物の生産性が高くなってくる。当然のことながらたくさんものできると、単価がさらに低くなる。という現象が生じてくるというのが一つ。それからもう一つはポー川という有名なイタリアで一番最大の川の、この北の方を流れてますけども、ポー川の流域になるわけですね。ポー川流域というのは、私があの年代だと知っているというか、思い出すことが多いだろうと思いますけれど、『苦い米』という有名な映画があります。若い方はおそらくご存じないと思いますが、これはまさに1945年から1950年頃にかけてのイタリアを象徴する映画だったと言ってもいいんじゃないかと思います。米、つまりイタリアでは米をずいぶん食べます、今でも食べますから、米の生産というのはヨーロッパではスペインに並んで多い所だったわけで、現在でも多いと思うんです。しかし稲を作るっていうのは非常に集約的な農業で、人手を

必要とする。日本はいち早く機械化に成功しているわけですね。田植えの田植え機から稲刈りまであるいは除草機までほとんど今では機械化しているわけです。ところがイタリアでは、やっぱりいくら米を食べると言っても、マイナーな方です。マイナーというのは全体の農産物からするとマイナー。そこで機械化には踏み切れなかったそうですね。それじゃあ日本からいい稲作の機械を買えばよかったんじゃないのかと言いたい所なんですけども、それもやらなかった。それで彼らが何をしたのかと言いますと、大量の労働力。これは1940年代から50年代頃までというのは、たくさん季節労働者として町から低所得層の人などを呼び込む、あるいはシチリア辺りからも呼び込んだというわけです。ところが、それを描いたのがさっき申し上げた、『苦い米』という映画だったわけです。ところがさすがにヨーロッパでも人件費が安いイタリアだったんですけども、だんだん高くなってきて、殊に工業、都市への集中が始まります。そうするとイタリア人の労働者をこういうところで使うということが困難になってきた。次が外国人労働者の受け入れということですね。エジプトとかアラブ諸国から労働者を安く入れて働かせる。稲作に投入するということをやったわけですね。ところがそれが今度さらに問題を生じるわけです。つまり農業労働者として働くよりは、町へ行って働いたほうが収入はいいわけです。そっちへ流れたという。しかもどんどん入れたのが今度はイタリアに滞留して帰らない。あるいはイタリアに帰化するという形になる。それが今度は次にはイタリア人の職を奪うという問題になってくる。それであんまり入れるなという話になった。結局、残ったのが荒れた水田だけということになるというパターンが生じたわけです。

で、ここでも先ほどのちょっとオランダとはケースが違いますけど、ここでも全くその自然再生というのが自然再生そのものだけの問題ではなくて、農業との絡みで行うようになったということになるわけです。それが結論なんですけれども、そこでどういうことが行われているかと言いますと、次お願いします。これがですね、昔の絵地図です。ローマ時代のこれは同じ場所、ほとんど同じ場所ですけども、実にたくさんの沼が、おそらく砂丘に区切られて海から切り離されてきたいわゆるラグーンが並んでいるのが描かれてますけども、非常に巨大なラグーンが存在しています。これもそうですね。非常に巨大なラグーンですね。次お願いします。で、これが現在の形なんですけども、ここに昔の農家がこれも廃屋になって残っています。ここは放置された農地です。次お願いします。これがさっき申しましたコマッキオ潟を有名にしたウナギ漁なんですけど、大昔からやっているんですね。こういう風な草地でですね、これも現在これは復元したものなんですけど、こういう

風な草地でやっているというわけです。

次お願いします。ここで考えられたのが、今いったような水田を放棄させた水田を元の湿地に戻すということが一つだったわけです。それは、そこでの考え方としてはパターンとして3つありまして、一つは完全な自然保護区にする、その湿地をですね。回復した湿地を水をはった水域を一つを完全な保護区にする。そこはもう限られた、まあ日本で言うならば国立公園特別保護区みたいなもので、特別な許可をもらわないと入れない。それから二番目は中に入ってもいいんですけども、例えばバードウォッチングのような形のレベルまでと、それからこれがイタリアでは面白い、イタリアのやり方だと思いますけども、淡水魚の養殖をやる。これは日本で言うと、カワカマスみたいなものを養殖して、それを面白いと申し上げたのは、それを近くのレストランに供給する。レストランはもちろん新しく作ったレストランに腕のいいシェフを町から呼んで、そこでいい料理を出すという形でそういった産物を使うというエリアが一つ。三つ目は動力船はダメですけども、カヌーとかあるいは小さなヨットだとかで水面で遊ぶことができるというようなエリア。というふうに三つのパターンに仕分けをして一種の農村リゾートに仕立て上げるということをやります。ここでの自然再生というのは、結局はあくまでも人間のための農村リゾートとしてのという意味での、ターゲットにしているということになります。ただしそれに付随してですが、今の水面の問題ですけども、水面以外に例えば先ほどローマの古い地図が出てきましたけども、もともとの砂丘列が残っているわけです。その砂丘列のところちょっと高くなっているところに森林を再生させるということをやりました。これは再生とって、いわば割と地層のいいところですから、放っておきますと、つまり伐採などを繰り返さなければ、次第に元のいわゆる自然植生が残って回復するわけです。それを丹念に残すようにして、結構立派な森を作り上げるということに成功している。その先がまた面白いんでして、イタリアの場合はその自然保護区、森林を含んだ自然保護区をハンティングエリアにしていますね。そこには鹿がもどってくる。あるいは野うさぎがやってくるというふうな状態まで戻している。そこにちゃんとハンティングフィーを取って、鹿だったら幾ら、ウサギだったら幾ら、という風な形でもって、そこに連れて、それを農協の収入にするというやり方をします。今は北海道ですと鹿が増えすぎて問題を起こしていますけども、その話をその現場でしましたら、イタリアの連中が非常に不思議そうな顔をしまして、せっかく撃った鹿をなぜごく一部の肉しか持って行かないで放棄するのか、それからもう一つはお前の言っている良い部分の肉だけ持って、後放っておくというけども、内臓だとか脳だとかイタリアだった

らそれが一番美味しいと思って食べる部分をなぜそこを残すのかというので、とうとう最後まで説明に苦しみました。お前の言うことはよくわからん。一番美味しいところを残してどういうわけだということですね、日本人はこういうところを食べるんで説明したんですけれども、それはイタリアで言うと、早く言うとカスミみたいなもの、筋肉みたいなところを食べて何が嬉しいかというふうな話になったわけですね。そういうようなことが質問が出るくらい、彼らは獲ったのはもちろん金を払ってとるわけですから、残すなんてもったいない。ことごとく全部解体して持っていくということをやっている。そういうことを含めた自然保護区、自然再生林というものを作っているということになります。これはさっき申しましたように、イタリアはイタリアの自然再生、あるいはターゲットもそうですけども、それから利用方法も、もちろん違うという一つの例になるんじゃないかと思えます。さてもう一つは、今ここにお目にかけているのはコマッキオの町です。町の再生もやっているわけですね。これはさすがに今申し上げたように、日本で言うならば水道みたいなところですよ。彼らに言わせると、ヴェネチアはあれはもう観光客、外国人観光客のための町だと。ここはイタリア人のためのリゾートにするという考えだと。ヴェネチアほどももちろん大きくないし、ヴェネチアほど目立った建物もない。しかし極めて素朴でんきで親しみやすい所だということ売り物にして、ここはイタリア人のためのリゾートという風なことやろうと思う。と。ただし中々したたかです。この中にちゃんと小さいんですけども、国際会議の開けるようなシアターが作ってあります。そこでここでの湿地のシンポジウムが行われたんですけども、なかなかかわいいシアターホールができて、小さいけれども、仕掛けは完璧だというのがあった。それからもちろんのこと、そういう外国から来た、まァイタリア人のリゾートだと連中は言っていましたけれども、小さな国際会議だったら十分に収容できるだけの小さなかわいいホテルができています。あるいは昔からあったんだろうと思えますけれども、そういうものを再整備してそこに泊めるということもやっていますし、それから、なかなか美味しいものを食べせる小さなレストランもできているという風な形をとっているわけです。これはやっぱりイタリア風の自然再生だと思えますが、自然だけではなくて、町もちょっと小綺麗にして、そういうものを全部トータルで考えるということをやっているというわけですね。それが一つの特徴ではないだろうかと思えます。

先ほどご覧に入れたオランダのマース川は完璧に川だけどのことをやっているわけですけども、このコマッキオのケースで言うならば、全部セットでやっている。保護区もあるし、いわゆる農村リゾートもあるし、レストランも町

もということになる。それから先ほどの例にありましたウナギ、だけではなくて小魚とか海老とかも含めた、そのラグーンでの漁業も使っているということで、トータルでというのが見られたということになると思えます。今ご覧に入れているような、まァどう考えてもヴェネチアに対抗できるような景色ではもちろんないわけです。歩いていても眠くなるくらいの町ですけども、それなりの風情があると考えていいのではないかと思います。ご覧に入れるのは実は写真としてはこんなところですよ、後は少しまとめということにさせていただこうと思えますが、今まで申し上げたように私の経験から申しますと、それぞれの地方、それぞれの国には当然のことながらそれぞれの考え方、あるいはそれに基づくそれぞれの手法があるわけです。そこで日本は日本なりあるいは最初に申しましたように北海道は北海道なりの考え方での自然再生があってもいいんじゃないだろうかという風に思えます。

一つの例ですけども、これもレジュメに若干は書きましたけども、京都の東山に有名な疎水があります。これは、延々と琵琶湖から引いてきたというものになるわけですけども、東山近辺にはかなりいろいろと昔から別荘があったりします。現在でもいろいろ残ってたりするわけです。そういうのを見ますと、これはちょっと日本の中でも特殊なものかもしれませんが、日本流の、あるいは京都流のと言ったらいいかもしれませんが、自然の再生の一つの考え方ではないだろうかというふうに思えます。というのは京都というのは元々、地下水に非常に恵まれていたところで、今でも井戸を掘ると結構いい水が出るところですよ。それから、元々、地形的に見ても大きな湖が存在したという風に考えられているところなんですよ。そういう意味合いでは水を大事にするという伝統が昔からあったわけで、現在でもここに見られるような、小さなものですけども疎水のような形として水を活かそうという考え方が強いわけです。

次お願いします。で、それを辿ってみますと、ずいぶんあちこちで、まだ今でもそこからの水を引いた庭園というのが残っているということになります。

次お願いします。で、ここはちょっと面白いんですけども、その一つの例として、ローマの水道橋じゃないかと思われるようなもので、これはもうもちろん大昔に作られたものではなくて、明治時代に造られたそうですけども、いかにもその当時のその、たぶんですね、ローマの水道橋の頭があって造ったんじゃないだろうかという風なものも残されています。だからイタリアとどうこうということなことを申し上げようとするのではなくて、つまり水を使う、あるいは水をどうやって活かして使おうかという点ではどこも同じような形、あるいは同じような考え方というのが

成立するのではないだろうかということを申し上げる例として持ち出しました。残念なことに日本の場合には、先ほどそのコマッキオの例と似たような干拓に関しての、というのは干すばかりであって、水の方を活かすというのは余り良い例というものが出せなかったものですから、どちらかという水を流すという風な例として持ってきたわけですが、同じような条件が存在するところと、同じような考え方が出てくるんじゃないだろうかという風に思います。

というわけで、最初に申しましたように私は決して庭園の専門家でもありませんし、造園にそんなに深い知識を持っているものでもないのですが、私たちの自然再生というものには、やはり日本なら日本、北海道なら北海道の土地に合わせた考えなり、手法なりがあってもいいんじゃないだろうか。海外の事例を中心にしているという注文でお話をしましたけども、それぞれに面白いと思われる例はたくさんありますが、それがイコール北海道に上手使えるものばかりではないだろうと思います。レジュメにも書きましたけども、自然再生というのは結局何らかの目標設定というのがまず大事だということになります。つまり同じパターンでやるということは考えられませんし、それからスケールも違うわけです。北海道の湿原で言っても、釧路湿原とサロベツとではやはりスケールが違います。それから美々川にいたっては全くこれは長さも違うし、周辺の環境も違います。そうなりますとそれぞれに何をそこで再生するのかという目標設定が必要になるだろうと思います。

それから自然再生を考える上では、どうやら先ほど申しましたように自然そのものだけではなくて、結局それを再生するのは人間だということになりますから、人間の文化、あるいは文化との関わりというものが何かということを考える必要があるんじゃないだろうかと思います。それからもう一つの面は、産業の面だということになります。と申しますのは、ターゲットにするのは、我々がターゲットにして自然再生をする、すなわち再生という言葉を使うからには、それは何らかの意味で前に変えられたということの意味するといっているのではないのでしょうか。それを例えば復元、できるだけ元の形に復元するのか、あるいは今までは違う形で使ってきたのだが、これからは少々また方向を変えて使わなくてはならないから、そのための再生ということもあるかもしれません。ですから例えば先ほどの農業にして、農業もこれもイタリアの例で言うと、水田とし

て使ってきたものを元の湿地に戻して、そこまではいいんですけれども、何を戻そうとするのか、何のために戻そうとするのかということが必要なんです。これはどの場面でも言えることになるのではないのでしょうか。今までいわゆるミスユースをやってきて、適切な土地利用を行わなかったもので、どうも例えば農業生産性も低い。だからここは放棄して、人間が使うのは止めて元へ戻そうとする。元へ戻そうとする先が、自然に戻そうとするのか。それともタイプを変えてまた使おうというのか。タイプを変えてというのは先ほどマース川の例で申しましたように、例えばレクリエーションで使おうとするということもあるかもしれませんし、その背景となっている景観として維持しようとする場合もあるかもしれませんし、それから先ほどイタリアの例で申しましたように、ハンティングエリアとしての自然というのを目標にするのかも知れない。いろんなケースがあるのではないかと思います。

つまり単一にパターン化して考えるというのは非常に危険であるし、無駄も多いだろう、ということになるのではないかと思います。ではそれをどうやって決めるのかということになります。これは先ほどマース川のところであったように、もし依然として農地、農家がそこに存在して、農業をそこで成立させていくというんだったら農家の人たちとの対話も必要でしょうし、意見も聞かなくてはならないということになると思います。それからイタリアのケースで言いましたら、農村リゾートというのが最初の命題として出てきて、そのために、ということになると、当然のことながら利用者の意見も聞かなくてはならない。

さて、それを釧路なり、あるいはサロベツなり美々川なりで、どういう風にやっていくのかというのが問題となるわけで、実際に今、私はそれにいわば直面しているわけです。と言いますのはこの11月頃から、釧路川で言いますと、釧路川の自然再生協議会というのが発足します。そこでどんな議論が出てくるか。専門家もいますし、NPO、一般市民もいますし、もちろん行政、自治体、農協など様々な人たちが様々な意見を出してくるということになると思いますが、私はそれを半ば期待し、半ば面白がって今それを待っているところということを申し上げて、私の話を閉じさせていただこうと思います。どうもありがとうございます。

(2003年9月12日北海道大学大講堂において)